投稿

「西条は何も無い所か」論争について
―B教授の発言に寄せて―

理学部三年　谷光昭彦

Ⅰ　私の発言の動機及び文中の匿名扱いのお断わり

私は、「広大フォーラム」二十六期八号のA氏の発言「アホにならないで」と同二十七期一号のB教授の〝「西条は何も無い所」か〟の両発言を読み、特にB教授の発言に異論がある。B教授の原稿の付記に「異論をお持ちの方からのご批判を切望している」とあるので、拙論を展開して私の考えを述べたいと思う。

また私は、この文中においてA氏・B教授という形で匿名を使うことをここにお断わりしておく。というのも、B教授の反論はその要旨として、〝広大生にある西条への「無神経さ」の指摘と問題提起〟として私は一定の評価をしてはいる。

しかし、A氏の発言の要旨は、II章に述べるが新入生への呼び掛けとしての文章であろう。

ここでA氏の実名をあげこのような強い調子で批判することに、私は一つの疑問をもたざるをえない。A氏は広大生のもつ「無神経さ」を文章にしたために、スケープゴート・見せしめになってしまったのではあるまいか。

この論争により、A氏は責任ある立場であったにせよ、ここまで晒し者のように扱われることはない、と私は思う。二十七期一号の「本誌二十六期についてのモニターからの意見」文中にあるように、「広大フォーラム」は「学生に対しては四人に一人の割合で配布されることになっている」そうだが（ただ、同誌の十五ページのグラフによると、学生で「フォーラム」を読んでいるのは、一部の学生のデータであれ、六・四％でしかない）、そのような手段に、私は個人名をあげ意見を述べることで、A氏・B教授の生活に支障をきたすことにとうてい責任を持てないので、私がこの文中において匿名で述べさせていただく。

II　A氏の発言への私の見解

A氏の発言を私なりに解釈すると、「西条は思っていたほど環境は整っていないが、それを新入生を含む学生に自身の行動力で有意義な大学生活を送ってもらいたい」ということであると考えている。

また、この文章を読んで思ったのは、とても痛快な文章であり、「よし、もっと行動を起こさなくては」と思った。例えば「（東広島大学ともいいます）」といったところに痛快さを感じ、その後の文章により、行動力を高めてほしいという新入生への訴えが強く印象に残ったのである。

この「アホにならないで」という表題によって、東広島市民や東広島市を侮辱するといった意図は微塵も感じられなかったのである。

しかしそう感じる人がいる以上、また、誤解を生みやすい表現であり、A氏の発言は、結果的に意図したものでなくとも不用意であったといわざるをえないだろう。またそのことについて、A氏は反省すべきであると同時に、自分の意図を説明するべく反論していただきたいと思う。

また、「西条は何も無い所」というA氏の指摘であるが、この意見については私も心情的に納得できる点がある。

というのも、B教授の言うように確かに駅前には大型スーパーもあり、プールバール添いには衣料品店もできている。しかし、西条の下宿事情は大変広い区域に分散し、車・バイク等の移動手段をもたない限り通学や買物には不便をきわめ、公共交通機関はその便数により自由に使えるものではないため、これらの利益を得る人は多くはない。また、遊びたい盛りの大学生にとって、西条のレジャー事情は、カラオケ・ゲームセンター・レンタルビデオを中心としていて、その種類はそう多いものではない。

「学生の本分は学業である」というなら、専門書を買うという状況においても厳しい状況がある。B教授は「JRでわずか三十分の距離に百万都市広島がある」と書かれている。が、実際に三十分で広島で買物ができるだろうか。

下宿から西条・八本松駅まで時間がかかり、JRで三十分。専門書を買うのに「紀ノ国屋」、「丸善」まで二十分ほど。それが往復で二倍の時間が掛かる。専門書はふつうの書籍と比べ大変高価な品であるのに、交通費で二〇〇〇円前後はかかるのだ。

生協はまだ設備が整っておらず、書籍の品揃えに不満があり、すぐ必要であるのに長くて三週間以上待たされたうえ、その本の入荷予定はないということもある。

今挙げた例はほんの一部ではあるが、こうした状況下で学生が「何も無い所」と感じるのは、「無神経」といえるのか。

B教授さえも、「西条という町が、学生諸君や我々教職員の勉学・研究上および生活上のさまざまな要求に百パーセント応えてくれている、などと言うつもりはない」といっている。しかし、個人が心情的に「何もない」と感じることに、めくじらをたてることがあるのか。

A氏は、新入生にむけ厳しい現実をオーバーに表現したのであろう。この「広大フォーラム」が学外に配られていることなど、学校が知らせてないのにA氏も、また広大生全体も知るはずはない。事実、学生の数名に聞いてみたが、この「広大フォーラム」が学外に配られている事実を知っている学生はいなかったのだ。

しかし、確かに「何もない」と感じるとはいっても、このことで、東広島市や市民に対して不満に思っているわけではないということをここに述べたい。

私はこうした事例を知っている。広大生の西条の下宿事情は新聞記事になるほどに供給不足であったり過剰であったりと混乱したものの、東広島市はつい一～二年前までは、学生用アパートを建てる場合、建設者へ行政的優遇処置を行っていた事実である。

必死に学生の住環境を整えていこうとする東広島市の姿勢には頭が下がる。また、NHKテレビ「新日本探訪」での東広島市民の方々の温かく広大生を迎えようとしている姿も、広大生としてありがたく思っている。

東広島市・市民の方々の努力を知らずに「何もない」というわけではないのであり、感謝したうえで誤解を恐れず、私は「何もない」というのだ。

この「何もない」と思わせている責任がどこにあり、それに対してどのように私が批判するのかは、後に述べさせていただく。

III　B教授の発言への私の見解・批判

次に、二十七期一号のB教授の記事についての私の見解と反論を展開したい。

B教授の意見は前にも述べたが、A氏の発言を発端としたうえで、広大生にある西条への「無神経さ」の指摘と問題提起として評価している。

私たち広大生に、交通マナーの悪さ、ゴミ出しを守らないということなど東広島市民とのトラブルを起こす者がおり、このことで東広島市民に迷惑をかけている。私も、そして広大生全体もそのことを率直に認め、広大生も東広島市に住むもの・市民として自覚し、一緒にとけこむ必要がある。

そのうえで、率直な意見を互いに出しあい、広大生にも東広島市民にも住みやすい東広島市をつくっていくという気概を持ち生活をしていくべきであるし、こうした気持ちを再認識して、私たち学生の中に訴えていく必要性を十分に感じている。

ただし、B教授が自分は部外者のような立場をとりこのような原稿を載せたことに、また、彼の大学当局者としての（個人的にと断ってはいるが）発言に、はっきり言って憤りすら感じるのである。

私は、B教授の意見に以下の点で批判を展開するが、その問題点をはっきりとさせるために番号をふっておくことにする。

①B教授の現状認識のなさ

II章でも述べたが、三十分で広島に行けるかのような認識や、学生がその生活を行う際にどれだけ苦労するのか、B教授はご存じなのか。

西条の豊かな自然を思うのも結構だが、それ以前に、普通に学生生活を送るのに金銭的・時間的にも苦労している状況の学生が、ゆとりを持って自然や星々に目が行くとでも思っているのだろうか。

そうでなくとも、西条に移ることで下宿代の高額化。移動にかかる金銭的・肉体的・時間的負担（自動車を使うにせよ、電車等の公共交通機関を使うにせよ。だいたい、東千田キャンパスの時のように、自転車で全ての行動が成立するような現キャンパスの環境ではない）。

金銭的に苦しいために、バイトをしようにも求人数が少ない（バイトの紹介を今はどこで閲覧できるようになっているのか。学生部の広報がなく、よく分からないのだが）。こんな事情をB教授はご存じであろうか。

つまり、B教授は現状認識がないといわざるをえない。ただし、この現状認識のなさは、B教授が広島大学に長くいる（現在も、これからも）ために、その長い在学期間の間に環境がよくなればいいとでも考えているためであろうか。

我々学生は、大概四年間の期間しかこの広島大学にはいないことを分かっているのだろうか。

そうした立場をわきまえて、大学当局者としても一教授としても、学生のことを考えてもらいたいと切に願うのである。

今の大学当局は、大学全体のことは考えても、そこに生活する人間（特に学生）のことは考えていないのでは、と思われる節がある。たとえば、理学部周辺に厚生施設がないこと。サークル活動要望書や返答会での担当当局者の「仕方ない」「検討します（＝三年も同じことを、結論を出さずに先送りすること）」といった返答。

これでは、学生と当局の間に時間の感覚の決定的な相違があると思われても当然ではないか。

当局の現状認識のなさと、成人たる学生を「管理」しようとする思い上りと、大学環境の発展のために、今いる学生を人柱にさせられるのはごめんである。

（以下、次号）

（たにみつ・あきひこ）

広報委員会への声

私は、反戦運動に取り組んでいる小野信彦というものです。知っている人は知っているとおもいますが、いつも昼休みに、広場で赤ハチマキ姿でマイク演説しています。

今回、私はこの『広大フォーラム』に、「私が反戦運動に取り組む理由―アジア侵略と日米対立　その歴史と現実を見据えて」と題する原稿用紙二十枚分ほどの投稿を出しました。

ところが、私の投稿は、広報委員会によって掲載を拒否されてしまったのです。広報委員会というのは、『広大フォーラム』を編集している学内の一委員会なのですが、「分量が多すぎる」「広報誌としての性格から、線引きは難しいが、主張がイデオロギーや政治的なものにコミットするものは認められない」等の理由で決定を下したということです。

私は、原稿用紙五枚分に分量を縮め、二度、三度と書き直しましたが、結局最後まで、掲載は拒否されてしまいました。

私は、このような在り方の広報委員会への批判と要望をここに明らかにする次第です。

広報誌では、政治的なものにコミットするものは認められない」と言いますが、そもそも広報誌で戦争責任問題等がハッキリ確認されていないような今の現実こそが問題なのではないでしょうか？

侵略戦争反対の問題は、〈いろんな意見がある〉では済まされない問題のはずです。戦争責任の追及と、「あの戦争は正しい戦争だった」という侵略美化の思想を並列に扱うような在り方は、「中立公正」を装って戦争責任を曖昧にするペテン師のやり方です。

先日、東広島で「広教組」という広島の教職員労働組合の大会が開かれました。日教組中央が思想転向して「日の丸・君が代」反対闘争を裏切る中で、あるいは右翼の妨害を受ける中で、「広教組」は今でも「日の丸・君が代反対」「教え子を戦場に送るな」のスローガンを掲げて頑張っているのです。

広報委員会の皆さん、広大の「先生」の皆さん！　小学校や中学校の教職員労働者が、戦争と天皇制に反対して頑張っているときに、私たちは「自分は関係ない」と自分の「学問」と研究室に隠れて済ませていいのでしょうか？

私たち日本の人民は、学生も学者も教職員労働者も、そうした誤りを、もう二度と繰り返してはいけないのではないでしょうか、絶対に！　文部省が弾圧をかけてこようとも、戦争反対・天皇制反対は断固として貫かねばならない問題だと私は考えています。

どうか、ともに、「ノーモア・アジア侵略戦争」、「ノーモア・ヒロシマ、ナガサキ」の運動をつくっていきましょう。

（なお、拒否された投稿文については、他の何らかの手段で公表したいと考えています。）

文学部二年　小野信彦（おの・のぶひこ）